製糸場と歩んだ歴史に幕

柔らかな食感 人気の名物

富岡「和風絹しゅうまい」の信州屋

世界遺産の富岡製糸場（富岡市）の正門前で名物の「和風絹しゅうまい」を販売してきた信州屋が30日、営業を終了した。明治初期に創業した前身の信州屋旅館から数えて、100年を優に超える歴史に幕を下ろした。慣れ親しんだ味を最後に楽しもうと駆け付けた常連客からは、閉店を惜しむ声が上がった。

長い歴史に幕を下ろした信州屋と7代目の太田昭寿さん＝30日

旅館は1872（明治5）年の製糸場開設に合わせて、現在の長野県小諸市から移り住んだ太田九兵衛が始めた。製糸場に繭を納める繭商人や地元の養蚕農家、生糸を出荷する生糸商人らが宿泊し、盛況した。

「製糸場で現金が入った商人たちは羽振りが良かったようだ」と7代目の昭寿さん(62)。度を越えて飲食してしまう人もいたようで、現金の代わりに客が置いていったとされる製糸場の版画も残されている。

和風絹しゅうまいの販売を始めたのは1989年。旅館で人気だったシューマイを販売用に改良し、隣の建物で売り出した。具材となる豚肉と玉ネギ、根ショウガは国産を使用。特注して仕入れる皮は絹のような柔らかな口当たりで、たちまち人気に火が付いた。

旅館を閉じてからはシューマイの製造販売に一本化し、百貨店やインターネットにも販路を拡大。2014年に製糸場が世界遺産に登録されると、富岡を代表する名物として観光客からも支持を得た。

一方で近年は原材料費が高騰し、利益を圧迫。後継者問題も重なり、事業継続を断念した。昭寿さんは「どこかで区切りを付けないといけない。長年のご愛顧に感謝したい」と話した。

店舗は製糸場正門前の好立地にあり、今後はテナントとして貸し出すという。隣で行う駐車場経営は続ける。

30日は午前10時の開店後から来店が相次ぎ、30分ほどで完売した。開店当初から通い続けたという斎藤孝さん(81)＝富岡市＝は「他のシューマイとは何かが違っていて、子どもや孫も大好きだった。閉店はさみしい」と残念そうに話した。（丸山卓郎）

製糸場に新型ロケット　世界遺産登録10周年記念展

富岡製糸場（富岡市）の世界遺産登録10周年を記念した「宇宙展」が30日、製糸場西置繭所で始まった。宇宙機器製造のIHIエアロスペース（同市）が開発に携わった国産新型ロケット「H3」の模型など約30点を紹介する＝写真。8月18日まで。

同社が固体ロケットブースターの開発を担当した「H3」の20分の1スケールの模型をはじめ、小惑星探査機「はやぶさ」が帰還する際に試料を守った「再突入カプセル」の実寸大レプリカなどを展示している。

同社は日産自動車の宇宙航空事業部をルーツに持ち、日産製の自動繰糸機が使われていた製糸場とも縁がある。展示は製糸場が宇宙産業にもつながる日本の技術革新の礎になったとして、市が同社の協力を得て開いた。（文　丸山卓郎、写真　宮崎浩治）

館林など6市町のHP一時閲覧できず　サーバー障害で

館林市や下仁田町など6市町の公式ホームページが30日午前、閲覧できなくなる障害が発生した。

館林市では午前8時15分ごろから約4時間にわたり見られなくなった。市秘書課によると、システムを運用する富士通Japan（川崎市）から「サーバーの不具合でホームページがつながらない」と連絡があった。市には同日朝、電話で「ホームページが見られない」と数件の問い合わせがあった。詳細な原因は調査中。緊急性のある情報はなかったという。

下仁田町や甘楽町、板倉町、大泉町、邑楽町でも同日午前、同様の障害が発生し、その後復旧した。いずれも目立ったトラブルはなかったという。館林市と同じ会社がホームページのシステムを運用していた。

熱中症搬送178人　22～28日の県内

総務省消防庁は30日、熱中症により7月22～28日の1週間に、県内で178人が救急搬送されたとの速報値を公表した。前週から35人増え、4月29～5月5日から始まった今年の統計で最多を更新した。死者はいなかった。

同庁によると、搬送者の内訳は、3週間以上の入院が必要な重症者は7人、短期の入院が必要な中等症は100人、軽症は71人だった。年齢別では6歳以下が1人、7歳～17歳が20人、18歳～64歳が58人だった。65歳以上の高齢者が99人となり、全体の約半数を占めた。

相沢さんの記念映画製作は東京テアトル　みどり市選定

考古学者、相沢忠洋さんの岩宿遺跡発見80周年を記念した映画製作に取り組んでいるみどり市は30日、映画の企画開発業者に東京テアトル（東京都新宿区）を選定したと発表した。8月20日に同社のプロデューサーと監督が同市で会見する。

同社は都内、関西で直営映画館7館を運営。アニメ「この世界の片隅に」（2016年）やオール群馬ロケの「影踏み」（2019年）などを製作している。同社からの提案は「相沢氏を題材にした自然美あふれるエネルギッシュな青春映画」だという。みどり市内を中心に撮影し、完成後は都内など全国の劇場に配給される予定。

共存 花粉症 克服

『絶望の林業』『虚構の森』（ともに新泉社）といった著書があり、現場取材を基にした独自の視点で森を見つめている森林ジャーナリストの田中淳夫（65）＝奈良県生駒市＝に、日本の林業が置かれた現状や課題を聞いた。

第2章　シン・山林論　7/8

国内林業 補助金頼り

現場取材を重ね、独自の視点で森を見つめる田中。日本の林業が置かれた現状を危惧する（提供）

―実態をどう捉える。

経済的に成り立っていません。そもそも公の補助金がなければ林業従事者は植樹も手入れも伐採もしないでしょう。国や県、市町村から順調に補助金を集められた場合、費用をほぼ100％まかなえることも多いと思います。

国が本格的に補助金を出すようになったのは戦後です。大規模な伐採ではげ山になった森林をもう一度育てるという「森づくり」のためでした。対象は当初、苗木の植栽が基本でしたが、徐々に広がりました。2000年代に入ると間伐材を搬出して売る「利用間伐」にも補助金が出るようになった。本来は経済行為なのにです。林業従事者は、木を売って得たお金も、補助金ももらうようになりました。

―補助金を肯定的に捉える事業者は少なくない。そうした構造が生まれたことのどこに問題が。

多くの場面で工夫する必要がなくなりますから、労働意欲を奪うことは間違いありません。たとえ利益を高めようとしても、補助金が減ってしまったり、利益率もわずかしか上がらなかったりすることが頭に浮かべば、人は楽な方を選ぶでしょう。

バイオマス発電の燃料にするチップ生産を例に検討してみましょう。もともとは、根株や製材時の残材を活用するために始まりました。今は、再生可能エネルギーによる電気を固定価格で買い取るFIT制度の影響もあり、伐採木の全てをチップにという考えが生まれている。販売価格は通常の木材より明らかに安いが、仕分けの手間や負担を考えるとチップを売って補助金を得た方がもうけられる。そんな理屈です。

岸田政権が国策とした花粉症対策の実態にも同じことが言えます。少花粉スギや無花粉スギの植え替えが進められていますが、終えるまでには数百年とかかるでしょうか。「発生源の抑制」にどれだけ意味があるのかも疑問です。ところが林業従事者がこう思ったとしても、補助金という形で金銭がもらえるなら、そちらの方を進めるのが現実です。

―人口減少で木材の建材需要は減る一方で生産量は増えている、とも指摘する。

人が減れば住宅の着工件数は減ります。加えて核家族化で家は建てたとしても小型化されています。建材需要が低迷するのはこうした理由です。

半面、国は「林業の成長産業化」を目指して木材生産量を増やそうとしています。「10年後の木材自給率50％以上」を掲げる政策をまとめたのは09年のことでした。補助金の効果もあって一定範囲を全て伐採する皆伐が進められました。すると供給が需要を上回り木材価格は下落しました。ばかげています。

加えて皆伐は、跡地に2年以内に植栽すべきだと林野庁が通知していますが、実際は7割が放置されています。森林破壊に金をつぎ込んでいるような状態です。一体、何のための補助金なのか。目先の対策を繰り返してきた結果です。継ぎはぎだらけで筋が通らなくなっています。（敬称略）

たなか・あつお　1959年、大阪府生まれ。静岡大農学部卒。出版社や新聞社勤務を経てフリーランスの森林ジャーナリストに。テーマは「森と人の関係」。最新作『盗伐』（新泉社、2024年）は立木を伐採して盗み取る違法行為の実態を明らかにしている。ブログも更新中。

歳入歳出とも減 財調は過去最高

県 23年度決算見込み

2023年度一般会計について、県は30日、歳入が前年度比8・7％減の8257億円、歳出が5・8％減の8095億円となる見込みだと発表した。新型コロナウイルス感染症関連の歳出入が減ったことにより、いずれも2年連続で減少した。自治体の貯金に当たる財政調整基金の年度末残高は42・5％増の920億円で過去最多となった。

歳入、歳出とも制度融資が特別会計に移管した08年度以降で4番目の規模となった。歳入の県税は3・5％増の2725億円で過去最多。歳出はコロナの病床確保料が減った補助費が11・7％減の2723億円、定年延長に伴う退職金減少で人件費が5・7％減の2009億円だった。

歳入と歳出の差から翌年度に繰り越すべき財源を差し引いた実質収支は93億円の黒字。うち28億円はコロナ関連の事業費確定に伴う不用額で、国に返還する。

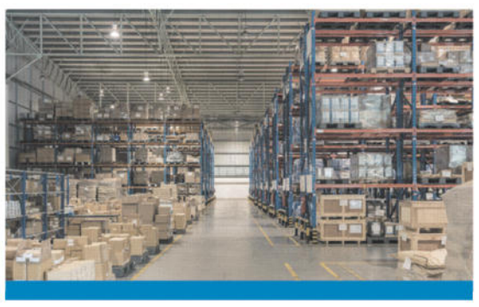
財政調整期金920億円のうち、コロナ関連の国への返還額などを除いた実質の基金残高は532億円。県の借金に当たる県債残高は臨時財政対策債を含めて2・6％減の1兆2554億円で、2年連続で減少した。

決算の確定は、県が本年度に導入した財務会計システムで不具合が頻発した影響を受けたが、予定していた7月末までに終えたという。（真尾敦）

JOBS　未来の地球を思い、資源をつくる仕事
北辰機材には、4つの事業部があります。環境保全を全面的に考え、2003年には「プラスチックリサイクル事業」を開始しました。これからも、リサイクル素材の活用により、持続可能な環境づくりに貢献していきます。

01 木材事業 Timber Business
現在の物流において、なくてはならないパレット。設計から生産までを完全カバーし、多種少量から大量ロットまで短納期体制を整えました。

02 段ボール事業 Cardboard Business
段ボールの特性を活かした内装部の仕切りも提案します。"ダンボールパッケージ印刷"で商品イメージも高めます。


03 物流機器事業 Logistics Equipment Business
私たちの物流機器の品質は、考えるよりも使っていただいたほうが理解しやすい。そんな体感性あふれるキャラクター商品を製造しています。

04 プラスチックリサイクル事業 Plastic Recycling Business
いかに、今使っている資源を有効に活用することができるのか…。今まで捨てていたものが資源になる…。そして、そこから新しい製品が生まれています。

HOKUSHIN　ぐんま愛
北辰機材では「パレット」「段ボール」「物流機器」「プラスチックリサイクル」の分野で事業を展開しています。
取引先の皆様から愛される製品づくりを心がけると共に、環境保全を念頭にした取り組みに力をいれています。
地球の色を守り、未来の色を描く。
北辰機材株式会社
伊勢崎市境東新井1270-8　Tel 0270-76-1515

PLASTIC RECYCLING BUSINESS
循環型社会の形成をめざす、北辰機材の新たな取り組み
今、社会で一番関心のある環境問題。当社はそうした時代のニーズに対応し、循環型社会の形成のために、プラスチックリサイクル事業を開始しました。
一般家庭から排出される容器包装プラスチック類を、選別、破砕、洗浄、乾燥し、リサイクルペレット化した原料を使用して、ウッドデッキを制作しています。

ハンディウッド What is "Handy Wood"
当社で製造したハンディウッドは、実は皆さんの身の回りの様々なところで使われています。木材とプラスチックの良いところをあわせ持った次世代再生木材ハンディウッドのウッドデッキは、ナチュラルな質感によりぬくもりのある空間を演出します。

使用実例

群馬県前橋市 正田醤油スタジアム ベンチ

群馬県伊勢崎市 伊勢崎駅南口 ルーバー

神奈川県横浜市 JR横浜タワー うみそらデッキ

東京都港区 お台場潮風公園 ベンチ